
気になる変わり者

はりがねん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気になる変わり者

【Nコード】

N1090X

【作者名】

はりがねん

【あらすじ】

ある学年のあるクラス。そのクラスには、いわゆる変人がいた。その変人の名は向坂リオウ。だが彼女自体はいたって平凡。成績も普通。容姿も普通。制服だってちゃんと校則を守っている。だが、変人である。なぜかは分からないが、変人である。

これは、そんなクラスの日常を描いた物語である。

注)「なんか魔王になった。めんどくせえ。」の番外編ですが、本編とは全く関わりありません。ですが、魔王さまの印象が変わります。180度くらい変わります。ですが同一人物です。すみませ

h_0

HR(1) (前書き)

ほのぼのな内容です。リオウさん、ほとんど寝ています。本編を
読んでいない人でも大丈夫。全然本編と関係ありません。
たまにイラツとするかもしれませんが。ご了承ください。

HR(1)

ある学年のあるクラス。

このクラスには所謂「変わり者」と呼ばれる人がいる。

久坂がいつものように教室に入ると、彼女は机に突っ伏して眠っていた。

彼女の名はリオウ。このクラスの名物であり、学年で注目されている変わり者。

ところで、皆さんは変わり者に対してどのような印象を持っているだろうか。

露出が大好きな人とか、前触れもなく人にべたべた触ってくるような人は、別に変人ではない。それはただの変態だ。変人と変態は全くの別物だ。そこだけは強く主張しておこう。

なぜなら彼女はいたって普通なのだ。

特別美人、というわけでも、不細工というわけでもない。顔の作りはいたって平凡。服装だってスカート丈は校則を遵守しているし、成績も特に可もなく不可もなく、だ。髪も染めていないし、化粧もしていない。服装検査の時はお手本として示される事もある。

彼女は模範生徒なのだ。

だが、リオウは変人である。

これだけは声を大にして主張できる。

「おはよう」

いつものように挨拶をしながら席に着く。リオウの隣の席のため、彼女にも挨拶をした事になる。

特に返事は期待していなかった。ただの自己満足。騒がしくして起こそう、なんて気はなかったし、彼女とはそこまで親しくもない。

「おはよー」

眠たそうな声が隣から聞こえてきた。驚いて隣を見ると、リオウがいつの間にか身体を起こしている。うつすらとしか開いていない目をこちらに向けていた。

思わず凝視すると、リオウは首をかしげる。

「あれ、違った？」

反応する前に彼女は再び机に突っ伏した。すでに寝息を立ててる。

「……………」

正直に困った。どう返せばいいのか分からない。

教室のドアが勢いよく開き、元気な声が教室に響く。

「おはよー!」

小さな背に、少し明るい色の髪をした女子生徒がそこにいた。彼女の名は朝香^{あさか}。ちなみに彼女の髪は染めている訳ではなく、自毛である。可愛らしい顔立ちをしており、笑顔がよく似合う少女だった。彼女は机に荷物を置き、リオウの方を確認する。リオウは突っ伏した状態でうつすら目を開け、手を上げていた。

「はよー」

「うん。リっちゃん、おはよー。もうおやすみなのか？」

アサカはいつものように笑顔を浮かべながら、リオウの元に歩いてくる。

「んー、ちょっと休憩してるだけー」

どこか眠そうで、間延びした話し方だった。

「まだ朝だよ」

「うん。だからだよー。ほら、昼に向けての英気を養っているんだよ」

非常に説得力の欠ける言葉である。リオウも自覚しているのか、口元に緩い笑みを浮かべていた。

「そつか。でも、もうすぐ先生くるよ？」

「大丈夫。寝てる様に見えるかもしれないけど、ちゃんと起きてるから」

「うーん。ならいいけど」

アサカはリオウの頭をあやす様に撫でる。リオウは気持ち良さそうに目を細め、再び寝息を立てていた。アサカはそれをしばらく苦笑して見ていたが、予鈴が鳴ったので席に戻る。

リオウは変わらず眠っていたが、教師はすぐにやって来た。すぐに学級委員が号令をかける。

「きりーっ」

声はでかいが、特にやる気を感じられない声。

椅子の引く音が隣から聞こえて視線を向けると、リオウは目を閉じたまま立っていた。その状態のまま「れい」をして、「着席」をする。着席と同時に机に突っ伏した。

教師はリオウに呆れたような視線を投げる。

「向坂むかみか」

教師に短く呼ばれ、リオウは目を閉じたまま身体を起こして返事を
をする。

「はい」

眠そうな声ではなく、気の抜けているような声であった。

「ちゃんと起きていろ」

「起きています」

目を閉じたままリオウは答える。

「……で、今日の連絡な」

教師も反応しづらかったのか、リオウに対する反応はスルーした。
ちなみに彼女はというと、すでに机に突っ伏している。それに教
師は呆れたような視線を投げるが、それ以上は何も言わなかった。

こうして今日も平和に朝は過ぎて行く。

HR(1)(後書き)

すみません。前書きで大変なネタばれをしてしまいましたので訂正しました。本当にすみません。すごい勢いでボケていました。すみません。

1 限目 現代国語（前書き）

訂正「先生は教科書に板書し始めていた」 「先生は黒板に文字を書き始めていた」

突っ込み所、満載過ぎるつつかりミスでした。本当にすみません。

1 限目 現代国語

教室に先生が入って来たと同時に、気のない号令がかかる。隣のリオウも目を閉じたまま立ち上がり、適当に礼をして座った。そして即座に撃沈する。

現代国語の先生は女の人で、身長は小さい。それでも百五十センチはおそらく、あるだろう。

先生は早速、リオウに目を付けた。

「リオウ。授業が始まりますよ。起きてください」

あまり語調は強くない。ちょっと注意をする、といった形だ。リオウはそれを無視する。先生も諦めたように溜息をついて、授業を開始した。いつもの事だ。

「教科書の三十六ページを開いてください。今日は新しい所に進みます」

隣のリオウは意外にも、教科書を開いていた。そもそも、先生が来る前に教科書とノートを出し終えている。寝ているようで、ちゃっかりしているらしい。

先生が教科書を読みあげていく。非常に退屈な授業だ。だが、仕方ない。文字面で意味は分かってても、読めない漢字がある。そのためには先生が一度読みあげる必要があるのだ。

しかし実際に先生が教科書を読みあげているのを聞いているのは少数だ。そう考えると、先生が少し憐れに思えてくる。生徒に同情されたくはないだろうが。

読み終わった先生は、黒板に題名を書いた。

「では、この話ですが、地球の環境について取り扱った物です。では、第一段落から朝香。読んでくれますか」

現代国語の先生は、生徒に対して丁寧^{ていねい}に接している。そのせいで生徒から舐められるのだが、なんだかんだで人気はある。授業も分かりやすい。

アサカは立ち上がって、教科書を読みあげていく。アサカは感情を込めず、機械的に淀みなく読み進める。

次に当てられた生徒も、つつかえながらも読み進めていった。時折、漢字が全く読めずに、かなり詰まる生徒もいる。そういった生徒は、周りから小声で読み方を教えてもらったり、先生がその単語を読みあげたりした。

「そこまでで良いよ。次、恵太^{けいた}」

久坂は呼ばれて立ち上がる。噛まずに何とか読み終える。

「次、リオウ」

先程まで突っ伏していたはずのリオウが立ち上がる。そして続きから読みあげていった。そして決められた所まで読み終え、席に座る。そして即座に突っ伏した。

起きていたのか？

久坂はリオウを凝視するが、リオウは反対方向を向いて突っ伏している。表情は読めない。

いつの間にか、先生は黒板に文字を書き始めていた。久坂も慌ててノートに書き写す。先生の話聞き、黒板に次々と書いていく。

板書が半分ほどまでいった所で、唐突にリオウが起き上がった。黒板を確認し、顔の向きをこちら側に変えて突っ伏す。そして右手にシャープペンを持ち、ノートに板書を写し始めた。

ここがリオウの不思議な所。なんだかんだでリオウは真面目なのだ。板書を写し終えたとリオウはシャープペンを置いて、目を閉じる。腕に置いているクッション代わりにタオルの位置が気に入らないのか、リオウはタオルの位置を目を閉じたまま直す。そして、力を抜いて寝始める。

どうせ写すなら最初から起きていればいいのに。

ちなみに、次にリオウが起きたのは授業が終わる十分前だ。板書を全て書き終え、満足そうに笑みを浮かべる。チャイムが鳴って、授業の終了を告げた。終わりの号令は皆、適当である。リオウも立っただけで、すぐに座った。教科書とノートを仕舞い。次の授業の用意を始める。

そして、次の授業の教科書とノートを枕にして、眠るのであった。

1 限目 現代国語（後書き）

ちなみに、この学校は私立です。入試での学力は中より少し上。年々、偏差値は上昇しています。

ですが、入ってから学力に大きな差がでます（受験が終わって気が抜けるため。特に二年になると差が出てきます）。そのため、実質として中の下の生徒も少なからずいるようです。

2 限目 数学

数学の先生は、ちょっとキャラが特徴的である。

まず、顔が濃い。日に焼けた肌、そして太い眉。若干禿げている髪は、たまに寝癖がついている。髪もまゆ毛の色も濃いためか、その存在感も更に増していた。

そして、何よりの特徴は話し方。イントネーション、というよりも発音が変わっているのだろうか。方言ではない、独特の話し方をするのである。

「おおい、向坂。起きんか」

隣のリオウは号令をした後、やはり撃沈していた。先生に呼ばれて片目を薄ら開けたが、それもすぐに閉じられる。先生は呆れたように溜息を吐くが、リオウは見事に無視するのであった。

こうして数学の授業は始まる。

「それで、ここはこうなって、答えはこうなるということですよ」

結果、撃沈しているのはリオウだけではなかった。周囲はいつの間にか机に突っ伏して思考を放棄している人やら、こつくりこつくりと船を漕いでいる人が多数見受けられる。文系だからといって、みんな数学を舐め過ぎだろう。その内、痛いしっぺ返しを見るぞ。

隣のリオウはいつの間にか起き上がり、黒板をノートに写している。黒板に書かれている部分を、ノートと見比べ、ページを捲めくっていく。練習問題のあるページを発見すると、それを黙々と取り組みかかった。

(最初から起きていればいいのに……)

しばらくすると問題を解き終わったのか、リオウは再び机に突っ伏す。そこまで授業が進むまで、眠る算段だろう。逆に疲れるんじゃないだろうか。実際に、寝ている人はリオウに限らず多かった。起きているのは久坂、アサカを含めて六人ほどだ。四十人以上いて、授業を聞いているのが六人。なんとも無残な状況である。

授業がようやく練習問題の所まで辿りつく。久坂は練習問題を解き終え、先生の回答待ちだった。回答の結果はまずまず。計算ミスがなければ、全問正解であった。

隣を見るが、リオウは変わらず夢の中のようなようである。

終了のチャイムが響き、目覚ましのように皆が目覚めます。眠そうな声で号令がかかり、先生は教室を出て行った。

リオウはまだ眠っている。休み時間が五分ほど過ぎたあたりで、ようやくリオウは目を覚ました。眠そくに目を擦り、周囲を見回す。教室の様子から授業が終わった事を察したのだろう。慌てた様子で黒板を見るが、すでに消された後である。リオウは席を立ちあげ、アサカの元へと向かった。

アサカは仲の良い友達数人とお喋りをしている。リオウはそこに割って入った。

「ごめん、アサカ。数学の練習問題って、答え合わせした？」
いつもと違い、眠気を感じられない声である。

「うん」

アサカはリオウの様子を気にすることなく、頷く。

「ごめん、ノート貸して。答えの部分だけで良いから」
「えー……」

笑みを浮かべているが、嫌がっている事は明白である。

「ほんと、ごめん。これつきりだから、貸して」

表情には出ていないが、どことなく切実な思いを感じられた。

アサカもリオウの様子に気付いたのだろう。いいよ、とノートを
リオウに貸す。

「今度から、しっかりとつてよ」

「うん、当然。ごめん。ほんと、ありがとう」

リオウは即答する。アサカはふわり、と笑った。

「そんなに言うんなら、いいよ」

いつもと違い、どこか優しさを感じる笑みだった。

リオウはノートを見比べ、何も書き足す事無くアサカに返す。

「ごめん。ありがとう」

「ううん。いいよ」

リオウは席に戻ると、教科書とノートを仕舞い、机に突っ伏す。

(リオウは、一体なにがしたいのだろう)

久坂にはリオウが何を考えているのか、分からなかった。

2 限目 数学（後書き）

教師のキャラが設定されていても、あまり目立ちません。

あくまで久坂がりオウを観察する形をとっていたためです。教師のキャラが気になった方はすみません。深い描写をする予定はありません。

3 限目 英語

英語の教師はちょっと鬱陶しい。

常に声を張り上げ、口うるさい感じのおっさんである。しかも果てしなく上から目線。だが、不思議と一部の女子に人気があった。本当に不思議だ。

「はい、授業を始める」

号令が終わると、教師はすぐに教科書を開き始める。

「前回の続きから始める。八十六ページの三段落目から、その肘を付いてポーっとしているお前、読むがいい」

リオウは今回は寝ずに、起きていた。ちなみに指名されたのはリオウである。リオウは教科書を持って立ち上がった。教科書を読みあげていくが 正直に言おう。発音が悪すぎる。だいたい、F o r e x a m p l e を発音ミスするなんて、ヤバくないか？ 中学生レベルの単語だろ？

リオウは時折折先生から鋭い発音の訂正を受けながらも、なんとか読み終える。席に座る際、大きな安堵の溜息を吐いていた。

「おい、誰が座って良いと言った」

リオウは再び立ち上がるうとするが、先生は「まあ、いい」とりオウを座らせる。

「次、その隣！ 訳を言え」

指名され、久坂は立ち上がった。リオウの読みあげた部分の訳を言うと、先生は「ふむ」と頷く。

「まあ、そんな感じだ。座れ」

なぜそこまで上から目線なんだ？ そう思わずにはいられない。だが、こういう所が人気らしい。女子の考える事は分からん。

リオウは身体は起こしていた。だが、身体から気だるさが漂っている。欠伸を噛み殺し、ノートに先生の読みあげる訳を書いていく。眠そうではあるが、手元はしっかりしている。先生は割と早口なのにも関わらず、それを素早く書きとっているのだ。

(他の授業でもそうやって起きていればいいのに)

リオウはよい意味でも悪い意味でも、人の視線を気にしない。どこか投げやりな部分がある。なのにノートだけは、しっかりと取っている。

(本当に、何を考えているんだろう)

こうして英語の時間も過ぎて行った。

ちなみに余談だが、アサカは英語の発音も訳も完璧だったらしく、上機嫌な先生に「いい発音じゃないか。おまえげに訳もよろしい」と褒められていた。

放課後、英語の発音が苦手なリオウに「どうやったら、そんな上手く発音できるの？」と聞かれ、「そんな事ないよ」と謙遜しているのが見えた。リオウは「そっか……」と肩を落としている。はぐ

らかされたのが分かるらしい。リオウは席について、再び夢の中へと戻って行ったのだった。

3 限目 英語（後書き）

どんどん短くなっていつていつて……。空白を含めずにカウントすると、1000文字いつていつていません。遅かったのにこの文章量……。なんか申し訳ないです。すみません。

4 限目 体育（前書き）

ちなみに体育の授業は男女別です。なので今回は朝香の視点となります。

4 限目 体育

この学校の教師は変わり者が多いと朝香は思う。見ていて楽しいし、授業も全く問題はないから気にならない。特に体育の先生は好きだった。

体育の教師は定年退職が間近である。それはあまり関係していないと思うが、この教師は放任主義だった。

その象徴とまで言える出来事は、初めてこの教師の授業を受けた頃までさかのぼる。

「授業に出席しているなら、適当に遊んでいて構いません。昼寝するなり散歩するなり好きにしてください。散歩の場合は僕の目が届く範囲で、遠くに行き過ぎないように。それから、授業に参加しなくても減点はしませんが、怪我をしたら大幅に減点します」

最後の部分で多くのブーイングが上がる。ちなみに、隣のリオウは「なんだそれは……」と突っ込みを入れていた。

「といますのは、体育というのは『体を育てる』と書きます。そして、体は勝手に育ちます。それを手伝う形で、適当に運動をして体を育てればいいのです。やる気もないのに運動をするのは怪我の元になります。それくらいなら、遊んでいた方が楽しいですよ？」

(確かにそうだと思うけど……それって、職務放棄?)

「確かに、そうだね。それ、楽そう」

リオウは眠そうに目を擦りながらも、小さな声で教師に同意する。体育は寝ながら参加できないよー。

そんなこんなで体育の授業はぐだぐだであった。だが、不思議と居心地は悪くない。授業を受けている人はいるし、なんだかんだでみんな参加している。リオウはバスケの時なんか、とても張り切っていた。

「足だけは自信あるんだよー。疲れにくいから」

それは関係ないと思う。

けれど、リオウは自信があると言っただけあって、バスケで走る時はかなりの距離を走る。コートの中から端を駆け回るのだ。その上、速さは落ちない。しかも連続で試合に参加している。疲れないのかな、と思えば、気の抜けるような声で「疲れたー」と呟いていた。ちなみに朝香は見学組だ。運動は苦手です。

「はい。こっちこっちー」

試合中、どこか気の抜けるような声でリオウは声をかける。そんなに大声を張り上げている訳でもないのに、不思議とその声は通った。

パスを受け、リオウはドリブルしながら走る。ゴール付近まで走り、そのままボールをゴールへと投げた。そのボールは不安定ながらも、見事に入る。

「やったー、入ったー」

どこか気の抜けるような声でリオウは喜ぶ。見ているこっちも気が抜けてしまう。

「朝香」

「ん？」

声をかけられ、朝香は振り返る。そこにはクラスメイトがいた。特に名前を覚える必要もないので、覚えてはいない。

「向坂さんつてさ、変わってるよね」

「んー、そうだね。だけど、そこが良いんだよ」

「そうだね。でも、見てるこっちの気が抜けちゃわない？」

朝香は苦笑いを浮かべた。

「うん。そうだよね」

「見ていて面白いけど……」

試合が終わり、交代になる。ちなみに、メンバーは常に適當であった。人数が足りなければ適當に声をかけ、参加したい人が参加する。

「あ、先生。次、うちらやる」

彼女は試合に参加するために先生の元へと走った。朝香はそれを見送る。

リオウは体操服の袖で汗を拭いながら、朝香の元へとやって来た。

「入ったよー」

「うん。見てたよ。よかったね」

「うーん。けど、眠いから今日はもういいや」

朝香は苦笑いを浮かべる。リオウは気にせず、隅にあったマットへと近寄り、横になった。そのまま身体を丸め、健やかな寝息を立

てる。

(寝るの早！)

マットで眠るリオウに、面白い物を見るような視線が集中する。

(……ほんと、人目を気にしないんだよね)

ほんの少し、リオウの将来が心配になる朝香であった。

4 限目 体育（後書き）

本編の方と性格が違いすぎますが、同一人物です。こちらでは常に寝ぼけているような状態となっています。

……この状態で本編にいたら、ほのぼのとした内容になっていたのかな？ それはそれで見て見たいような……無理です。さすがに見知らぬ土地でこんな無謀な状態にはなれないでしょうね。

昼休み（前書き）

女子は更衣室で着替えますが、男子は教室で着替えます。

ちなみに、クラスのほとんどは学食を食べに行ってしまうため、教室には人が少ないです。その描写はありませんが、今回も久坂は
いません。なので朝香視点です。

昼休み

体育の授業を終えて教室に戻ると、制汗剤の臭いがした。複数の臭いが混じり合い、不快な臭いとなっている。朝香は微かに顔をしかめながらも席に戻り、机の横に体操着を入れた袋をかけた。

「くさ……」

リオウは呟きつつも、窓際の席に戻る。いつも以上に目が細くなっているのは気の所為ではないだろう。荷物を机に置くと、すぐに窓を全開にする。窓を開けた瞬間、安堵のため息をついていた。臭いがなくなると、リオウは口元に微かに笑みを浮かべる。

「お昼だー。ご飯だー」

リオウは上機嫌に呟きながら、鞆から昼食となる菓子パンを取り出す。菓子パンは二つあり、両方とも大きい。以前は三つ食べてたが「最近お小遣い少ないんだよ」と数を減らしたらしい。

リオウは軽い足取りで朝香の前の席へと座る。

「りっちゃんは、お昼ご飯と寝るために学校に来ている様なものだもんね」

朝香の言葉をリオウは違うよ、と否定した。

「学校は勉強するために来てるんだよ。私がお飯の事と寝る事しか考えてないように言わないでよ」

「あ、そうなの？ ごめんごめん。そっだよ、学校は勉強のために来ているんだもんね」

(とてもそうは見えなかったんだけど)

一体、リオウの思考回路はどうなっているんだろう。けれど、そう考えるなら辻褄が合う部分もある。だが、それ以上に矛盾が多かった。

(だったら最初から起きていればいいのに)

目の前のリオウは菓子パンの袋を開け、大きな口を開いていた。

「りっちゃん、ストロップ」

「？」

リオウは開けていた口を閉じる。不思議そうに朝香を見ていた。

「どうしたの、アサカ」

「りっちゃん。女の子なんだからさ、もう少し控えめに食べようよ」「ん？　なんで？」

リオウは不思議そうにしながらも、大きな口を開いて菓子パンを食べる。いつもの事だった。

朝香は軽く息をつく。

(まあ、いつか。りっちゃんらしいし。りっちゃんがそれでいいって言うんなら)

実は、このやりとりは以前もしている。その際もリオウは分かっている様子だった。自覚するまでは放っておいた方が良かったかもしれない。その時には手遅れになっているかも知れないけど。

朝香も自身の弁当を開ける。朝香の弁当は二段で、上の段におかず、下の段にふりかけご飯が入っていた。箸を取り出し、朝香も食べ始める。

基本的にリオウは食事中に話しかけたりはしない。マナーとしてというよりも食事に夢中になっていると表現した方が正しいだろう。実際、朝香の方を見ようともしない。その代わり朝香の弁当は凝視している。

……食べづらい。

リオウは朝香の弁当の中にある、赤い物体から視線を離さずに見つめている。赤い物体とは、ミニトマトの事だ。リオウは野菜が好きで、特にミニトマトが好きである。本人が言うには、トマトは「小さいのよりも大きい方が好き」らしい。

朝香が半分も食べ終わらない内に、リオウは自身の昼食を食べ始める。菓子パンの袋を重ね、小さく折りたたむ。たたみ終わったりオウは再び朝香の弁当を凝視する。

「……ねえ、朝香。なんでトマトを最後まで取っておくの？ いら
ないなら、もううよ」

その目がなにかを期待しているかのように輝いているのは気の所為ではないだろう。朝香は内心で苦笑しつつも、弁当箱からミニトマトを差し出した。

「仕方ないなあ。はい、どうぞ」

「ありがとうー！」

リオウはにこにここと微笑みながら、幸せそうにミニトマトを口に

入れる。本当に幸せそうだ。

「りっちゃんは本当においしそうに食べるよね」

「ん？ そうなの？」

「うん」

まあ、おいしいから良いんじゃないかな、とリオウは笑う。

朝香は中身を半分ほど残したまま、弁当を仕舞い始める。リオウは不思議そうに朝香を見た。

「食べないの？」

「うん。もうお腹いっぱいになっちゃった」

「大丈夫？ その弁当箱、あまり大きくないよね。ちゃんと全部食べないとダメだよ」

朝香の弁当箱は、女子の弁当箱として普通の大きさである。だがリオウの基準では小さいらしい。どこか少しズれているリオウの言葉に、朝香は苦笑する。

「本当に、もうお腹いっぱいなの。りっちゃん、食べる？」

リオウは微かに目を丸めた。リオウは基本的に思っている事が表情に出やすい。常に自然体でいるからだ。唯一例外があるとすれば、彼女自身が本心を隠そうとする時だけ。もつとも、そんな事は滅多にない。

「え、いいの？ くれるなら喜んでもらっけど……本当に、もう無理なの？」

「うん。このままだとゴミになっちゃうから、もったいないし。それとも、もうお腹いっぱい？」

「全然平気だよ。それなら食べるよ。後からやっぱり欲しい、って言うってももう遅いからね。止めるなら今の内だよ」

「大丈夫だよ」

リオウは目を輝かせ、朝香の弁当に手を伸ばす。リオウは弁当箱に手をつけてしまえば食べる事に集中する。だから最後に確認も兼ねて朝香に聞いたのだろう。

朝香は幸せそうに弁当を食べるリオウを見ている。リオウは夢中になっているらしく、朝香の視線には気付いていない。

（平和だな……）

リオウを眺めると、特にそう思っただった。

昼休み（後書き）

この話がこの小説の中で一番長い……。おかしいな、そんなつもりはなかったはずですが……。
リオウは食い意地張り過ぎです。

5 限目 古典（前書き）

お待たせしました。

5 限目 古典

予鈴が鳴り、廊下にいた久坂は急いで教室へと戻る。丁度、古典の教師が階段から上がってきた所だった。

「なんだ、まだ廊下にいるのか。さっさと中に入らんかい」

言葉ではきつそうに見えるが、間延びして緩い口調のため、全く怖くない。むしろ和やかな気分になる。

廊下にいた生徒たちは「はい」と気のない返事をして教室へと入っていく。ちなみにこの様子が見えたのは廊下側の窓が開いていたためである。

教師は老人と表現しても差し支えない年齢だ。

「では授業を始める」

だが号令の係は教室の喧騒で聞こえないのか、号令をかけようとしな。

「はよ号令かけんかい」

先生に言われ、ようやく気付いたように号令をかける。先生は不服そうだが、まあいい、と教科書を開く。

「それで、前回の続きから授業を始める」

先生が授業を始めるが、周囲の生徒のお喋りは止まらない。先生自身も大して気にしていないのか、そのまま放置している。

「だから、えーと……何ページからだ？ ちょっとノート見せてね」

先生は一番前の席にいる生徒のノートを覗き見る。ノートの内容を読み、納得したように頷いた。

「教科書四十八ページからだな。一度読みあげるから、しっかり聞け」

聞いている生徒は実際に何人いるのだろう。リオウのように撃沈しているのならば問題はないが、お喋りをしている生徒たちが非常に多いのだ。授業を聞こうにも、これでは一部聞こえなくなってしまう。古典の先生は余程ひどくならない限り、何も言わないのだ。

先生が教科書を読みあげていく、その時、女子生徒の一部が大きな笑い声を上げる。どうやら盛り上がりつつあるようだ。こちらにしてみれば、良い迷惑である。

「うるさいっ。少しは静かに聞けんのか」

先生は笑い声を上げた女子生徒を睨みつけた。女子生徒の一人が「ごめんなさい」と軽く謝る。どう聞いても本気で謝っているようには聞こえない。

隣で何かが起き上がった。リオウである。

正面の黒板を眺め、時計を見て視線を逸らす。リオウは窓の外を見下ろし、空を見上げた。正面に向き直るかと思いきや、ずっと空を見上げている。久坂にしても、いつまでもリオウを見ている訳にもいかないで、正面に向き直るが授業に集中する事はできなかった。教室が騒音に包まれているためである。

(あー……本当にこいつら高校生かよ……)

注意されても、すぐに元に戻るなんて、こいつら小学生かよ。
思わず頭を抱えたくなるが、そうもしてられない。今は授業に
集中しなければならぬのだ。

「……………くあ
」

視界に入るリオウは暢気に欠伸をしている。こんな雑音だらけの
場所でも、とことんマイペースを地で行く奴だ。
久坂は、少しリオウが羨ましくなった。

5 限目 古典（後書き）

短い上に、全然リオウと絡んでいません。正直、出すべきか迷いましたが、出しました。気に入らなかつたら、すみません。

6 限目 総合(前書き)

9 目次

6 限目 総合

今日の総合の授業は学校祭についてだった。

もつとも、この学校は部活動が盛んで、部活を優先する人が多い。そのため、学校祭に力を入れるクラスは少なかった。盛り上がっている所に「ちよつと部活があるから……」と抜けて行く生徒がいるのだ。士気が落ちるのは仕方のない事だろう。

しかし、そんな事とは関係なしに始めから士気の低い奴もいる。

「ほら、りつちゃん。目を覚まして。一緒に決めようよー」

「んー、何を？」

それぞれの意見を出しあうために、席の移動を担当は許可していた。その結果、リオウのすぐ傍に朝香がいるのである。

朝香は寝ているリオウの身体を揺すって起こし、おはよう、と声をかけた。

「うん。おはよー」

「とりあえず、どの部門が良い？」

「楽な奴ならなんでも……」

学校祭は三つの部門に分けられている。

教室内を利用して何らかの催しをする、教室部門。

出入り口や通路、階段などに飾り付けをする、展示部門。

体育館のステージ上で出し物をする、ステージ部門。

一番の人気はステージ部門であった。もつとも、上級生である三年生を優先に決めるため、ステージ部門の望みは薄い。そうなると、

二年生以下は展示部門か教室部門のどちらかになるのが定番である。

「あー……やっぱり、展示かな」

「なんで？」

「だって、当日楽じゃん」

ずいぶんと極端な理由だった。

ちなみに展示部門のみ、当日の仕事は全くない。時折、修繕する必要があるのだが、基本的に展示する物を作ってしまったえば終わりである。

しかしあまり派手で無いため、生徒からの人気はない。

「教室部門だと教室にいないといけない時間があるし、ステージ部門だと色々とめんどくさい」

「めんどくさいって……そういうのも含めて、学祭の楽しみなんだよ？」

「私は楽しいとは思わない」

朝香は首をかしげ、考えた。

「……りっちゃんだったら、そうかも」

「はい！ じゃあ、そろそろ多数決をとりまーす！ まず教室部門が良い人ー」

三人ほどが手を上げ、学校祭実行委員が黒板にメモをしていく。

「じゃあ、展示部門が良い人ー」

「はい」

リオウは気の抜けた返事と共に、手を上げた。残念な事に、リオ

ウ一人である。

「うわー……」

リオウは即座に机に突っ伏した。

「ま……負けた……？」

「りっちゃん……」

朝香は苦笑いを浮かべる。

「じゃあ、ステージ部門が良い人ー」

教室内のほとんどが手を上げた。当然その中には朝香も入っている。ちなみに久坂は教室部門だ。

「うつつ、なんてこった……」

「ドンマイ」

朝香は微笑みを浮かべて、机に突っ伏しているリオウの頭を撫でるのであった。

6 限目 総合（後書き）

他にどんな授業があったか思い出せず、総合にしました。ちなみに個人的に総合の授業は、ぶっちゃけなんでもありだと思っています。ドッチボールとかバスケットか、遊んだ記憶しかない。

おそらく授業に関する内容はもう出てこないと思います。まだ卒業してから三年しか経っていないのに授業内容覚えていないとか…。

そんな訳で、次からランダムに番外編です。更新速度はかなり遅いと思います。ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1090x/>

気になる変わり者

2011年11月16日21時52分発行